喫茶店文芸

2022年1月号

喫茶店文芸 2022年1月号――目次

天野満　C'est la vie！　1

マサユキ・マサオ　彼の思い出　7

氷川省吾　トゥマーン（Vol.2）　19

C'est la vie !

天野満

暮れの雑踏する駅前に、ため息が紛れて消えていく――。
ため息をつくと幸せが逃げるよ、と言ったのは誰だったか。
家族？　友人？　先生？　それともテレビかラジオで聞いたことだったか。
誰だっていい。それが明らかになったところで、このため息が止まるわけでもない。
能力が低いがために、あるいは何かしらの事情で上層部に嫌われた社員は閑職に追いやられる。いわゆる「窓際族」だ。しかし、本当の窓際族は窓際の席ではなく、追い出し部屋――倉庫同然の埃っぽくて薄暗いオフィス――に叩き込まれる。
もともと高いキャリア志向も金銭欲もなかったので、自らの境遇をむしろラッキーにさえ思っていた。が、やることがないというのは思っていた以上に人の精神をすり減らす。日々、何もせずに過ごしているはずなのに、疲れがどんどん溜まっていく。それでも、とりあえずの生活のために仕事を辞めるわけにはいかない。

C'est la vie.〈仕方ない〉

転職？　独立？
そんなコネや能力があればとっくにやってる。
袋小路で頭を抱える前にね。

工場のベルトコンベアを流れる部品のように改札を通過し、ホームで列車に押し込まれる。駅員がけたたましいホイッスルを鳴らし、電車のドアが閉まる。

車窓の外に広がるオフィス街の明かりは空虚で遠く、自分には無関係に感じられた。

狭っくるしい六畳一間のアパートに帰るやいなや、床にカバンを投げ捨て、バスルームに向かう。
髭と顔の産毛をカミソリで剃ってから、洗顔フォームで顔の油脂分を洗い流す。化粧水を染み込ませたコットンで肌を保湿する。それからグリーンベースの化粧下地、白のファンデーションを順に塗る。
メイクはアイラインが命だ。だから引くときはいつも緊張する。特に利き手と逆側が難しい。震える手で、慎重に目を縁取っていく。次にアイシャドウを塗り、仕上げにリップを口紅に塗る。
カバーネットを被るのを忘れていたのに気がついた。メイクを崩さないように気をつけながら髪の毛をネットに収納し、その上からウィッグを頭に被り、さらに黒のキャスケット帽子を被る。
やあ、セラヴィ、やった会えたね。

――君に俺の人生を君に捧げよう。
――だから、俺に生きる喜びを教えてくれ。
彼女は笑った。鏡の中で笑った

闇に溶け込むような黒の衣を纏い、金色の髪を夜風になびかせば、世界はなんと美しい。
鼻歌を歌いながら、足を一歩踏み出すたび、心は天へと舞い上がる。退屈な公園の遊歩道が、無機質な自販機の明かりが、生命

を宿して鼓動する。

——夜中に女装して、近所の公園を徘徊するなんて、正気じゃないのかもしれない。

——会社の人間にバレたら人生が終わるかもしれない。

でもやる価値はあった。

初めて世界を美しいと感じることができたのだから。

チリンチリン。

背後から鈴の音がした。振り返ると、遠くに誰か人がいるようだった。街灯の明かりが、その姿を照らした瞬間、足元から凍りつくような気分になった。

一輪車に乗った、全身黒タイツの狐面がこちらにやってくる。

気がつけば狐面と逆方向に走り出していた。

逃げなければ、殺られる。呪い？　的なやつで、殺られる。多分あれは科学で説明できない何かだ。もし、人間だったとしてもまともなやつじゃない。嫌だ嫌だ嫌だ。翌日の朝刊に載るなんてゴメンだ。

〈公園で女装した男性の遺体が発見！〉

——ハシモトさんですか？　あの窓際族の？

——まことに遺憾です。あんな人と一緒に働いていたなんてねえ……。

——ご冥福をお祈りいたします。知らんけど。

すみませんすみませんすみません！

もう女装して深夜徘徊なんて辞めます。勇気なんてクソ喰らえ。空虚さを抱えて、冴えないオッサンとして過ごすの最高。一生、窓際族でいいから女装姿で死にたくはない。

狐面との距離はどんどん狭まってくる。追いつかれるのは時間だった。

イチかバチかだ。

藁にもすがるような思いだった。公衆トイレの個室に入ってカギを閉め、口元を手で押さえて息を殺した。

見つかりませんように。

ドアの向こう側で、ジャリジャリと音が聞こえる。タイヤが砂道の上を転がるときの音だった。

狐面は俺を探している。

一体、なんのために？

ドアを開けるか否か——。

どれだけの時間が経っただろうか。外からもう音はしなくなった。

警察に連絡するべきだろうか。ダメだ。そんなことをしたら俺が女装して深夜徘徊しているのが世間にバレてしまう。両親に、知人に、会社の人間にどんな風に思われるか——。

ゆっくりドアを開けて外を見る。

狐面の姿はない。音を立てないように、危険が来てもすぐに反

応できるように身構えながら、公衆トイレを出た。一体、ヤツはなんだったのか。わからないが、すっかり気分が乱れてしまった。もう散歩どころではない。俺が何をしたっていうんだ！

C'est la vie.〈人生って、こんなものさ〉

家に帰ろうと、公園内を歩いていると、どこからか奇妙な音が聞こえてきた。

狐面か！　と思って、耳を済ませて警戒していると、その音の異様さに気がついた。

まるで、口を塞がれた人が出す呻き声――。

まさか、さっきの狐面か！

声のする方へ駆け寄ってみれば、怪しい大柄な男が女の人を羽交い締めにしているではないか。

「ななななななな、何っ、を」

何してんだ！　とか、バシッと言ってやるはずだった、が、狐面と遭遇したときの恐怖が残っていたのか、うまく声が出てこなかった。

助けて！

と、女性が叫ぶと、男は女性を手放し、弾かれたように逃げ出した。

慌てて男のあとを追う。女装の服はヒラヒラして走りにくく、どんどん距離を空けられてしまう。

段差を飛び越え、木立を抜けて、男を追い続けた。正義感だけで追っているわけじゃない。この公園で未解決事件なんて起こされては、女装して歩き回れる場所が少なくなってしまう。そんなことは許していいはずがない。息が上がりきったころ、ようやく男の姿を捉えた。

「ま、待って」

と、呼びかけると、振り向いた男が叫んだ。

「誤解だよ！」

「はあ？」

「引ったくりなんだよ、あの女！」

「なんだと！」

「アンタが来なけりゃ！　誤解されると思ってとっさに逃げたんだよ！　つーか、あんた……なんだその格好」

「俺の勝手だ！」

ややこしいことしやがって。思わず踵を返して、先ほどの女――とんだタヌキ――のもとに駆け出した。

戻ったときには、もう女の姿は無かった。そもそも男の言っていたことは正しかったのか。いや、男が言ったことが嘘という証拠は――。もう何が何やら、どうしていいかわからなくなった。

「なんて人生だ！」頭を抱えて叫んだ。

ごめんよ、セラヴィ。俺が不甲斐ないばっかりに！　どうすりゃよかったのかわからなかったんだよ！

答えはすぐに見つかった。女の叫び声とともに。

叫び声のした方に駆けつけると、先ほどの女が、尻もちをつき、口をパクパクさせて震えていた。

女が指差す先には、さっきの狐面が両手を広げて一輪車に乗っ

たまま立ちふさがっていた。
夜の公園にいきなり、あんな奴が現れたら、誰だって腰を抜かす。
ウー、とパトカーのサイレンが聞こえたとき、俺は自分が女装していることを思い出し、その場を逃げだした。警察の事情聴取を受ければややこしいことになるのは間違いなかった。
パトカーからだいぶ離れたところまで逃げ続け、さすがに走り疲れてしまい、立ち止まって息を整えていた。
すると、聞き覚えのある鈴の音とともに、狐面が一輪車に乗ってこちらにやってきた。
勘弁してくれ！
逃げようとした、が、足がもつれて転んでしまった。
ううう、と涙が出てきた。こんなことなら、パトカーのほうに行けばよかった。
とうとう、狐面がすぐ近くにやってきた。一輪車から降りて、こちらに手を伸ばす。
許して、と後ずさりながら懇願した。
見覚えのある財布が狐面の手に握られていた。
「それって」
受け取って、中身を確認してみた。自分の財布だった。
「届けてくれたのか」
狐面は黙ったまま、腕を組んでモジモジしていた。
夜の公園のベンチに女装男と狐面の怪人が並んで腰掛けている。
そんな前衛芸術よろしくの光景を我々は繰り広げていた。
「さあ、遠慮せずに飲んでね」
狐面に自販機で買った缶コーヒーを渡した。財布を拾ってもらったのお礼のつもりだった。しかし、狐面は缶コーヒーを手にしたまま、微動だにしない。
「もしかして、缶コーヒー嫌い？」
首を横に振って否定している。もしかすると。
「お面してるから、飲めないとか……」
狐面が顔を近づけて、圧をかけてきた。何かが癪に触ったらしい。
「すみませんすみませんすみません」
圧を解いた狐面はこちらに一瞬そっぽを向けた。向き直ったとき、缶コーヒーのタブが開いていた。
面ずらして飲みやがったな、コイツ。ホッとしたような息をついた狐面を見て苦い笑いが湧いてくる。
「セラヴィっていうの。よろしくね」
狐面もセラヴィと同じような存在なのかもしれないと思うと、奇妙なことになんだか親近感が湧いてきていたのである。だから、セラヴィとして名乗ってみた。仮面について指摘したことを侘びたかった。自分だって、ウィッグじゃねえか、とか、メイクじゃねえか、とか言われたら嫌な気分になるだろうから。
狐面はおもむろにベンチから立ち上がると、腰のあたりから、巻物を取り出した。

〈玉藻〉

勝訴、と書かれた紙を掲げるように巻物を広げた狐面。

「――ギョクモ？」

狐面は、体を震わせながら先程より強烈に圧をかけてきた。

「すみません、たまも、で読み方あってるんですね」

謝ると、狐面はどことなく満足げな様子になって、無言で会釈をしたのち、一輪車にまたがりどこかに消えていった。鈴の音が遠ざかっていく。

一体、なんだったんだ。

狐に化かされる、とは今日のために生まれた言葉だ、と思った。

溜まった疲れが急に襲ってきて、地面に大の字になって寝転がった。

あたりはシンと静まり返っていて、夜空には星が綺麗だった。

全く、なんて夜だ。

一人で大笑いした。生まれて初めて腹の底から笑ったような気がした。

Oui c'est la vie!〈そうとも、これが人生さ！〉（了）

彼の思い出

マサユキ・マサオ

「文子、さっさと荷物運びなさいよ」
「分かった、分かった。あぁっ！　机の中は私が出すからいいってば！」
葛城文子は母親の手伝いを借りて、引越しの用意を進めていた。念願叶って志望する教育系の大学に合格し、今春からは故郷を離れて下宿生活だ。入居予定の寮には高校の先輩も住んでいる。「絶対合格してね」という先輩の言葉を思い出し、文子は微笑む。
文子には手に取るもの全てが懐かしく感じられた。陸上部時代の賞状、後輩からの寄せ書き、使い古された教科書、どれも大切な思い出。中学の卒業アルバムを開くと、まだあどけない自分、そしてクラスメートの顔があった。みんな元気にしているだろうか。ふと竜之介の写真に目をやる。当時、大人びて見えた彼の顔もまだ幼く頼りなさ気に見える。全てが遠い過去に思え、しかし昨日の出来事のようにも思い出すことが出来た。
「ほら、また手が止まってるっ」
痺れを切らした母親が、せっかちに手を出してきた。クローゼットの上に積まれた荷物を、いっぺんに下ろそうとしている。その瞬間、母の体がのけぞった。勢い余った缶箱は、腕をすり抜け床に落下し、盛大に中身をぶちまけた。
「あーもう、だから自分でやるって言ったじゃん」
「そんなこと言ったってね、文子がぼけっとしてるのが悪いんだからね」
悪びれずに母は言った。二人で何か作業をすると必ず言い争いになる。あと一週間もしないうちに離れ離れになってしまうというのに、お互い意地を張ってしまう。親子揃って似た性格だな、と文子は思う。
「はいはい、文子が悪うございました。後は大丈夫だから任せてよ」
ポンポンと母の肩を叩き、追い出すようにして文子は一人になった。とりあえず一人になりたかった。そうして散らばった缶箱の中身を片付け始めた。そこには人に見せるもはばかられる恥ずかしいメモ書きや、自己表現だと言って書きなぐったイラストやらが入っている。
「あっ」
文子は手を止めた。
それがどうゆう経緯の物だったか思い出すまで数秒かかった。それは文子の持ち物では無かった。ガラクタに埋もれたそれを手に取り文子はぼんやりと見つめる。
「なぁに、ウダウダ悩んでんねん！」
「えっ？」
脳裏に彼の声が響いた。そうだ、これは彼の物だった。
文子は吸い寄せられるように記憶の糸を手繰り始めた。窓から初春の午後の日差しが差し込んでいる。一つ屋根向こうの道沿いを、中学生らしい女の子が二人並んで歩いていた。文子は、数年前の自分の姿を彼女らに重ねた。
四年前の新学期も確か、こんな春霞のかかった日和だった。桜の蕾が膨らみ始めた校門前を文子は歩いていた。

「三年生も同じクラスになれるといいね、って話聞いてる文子？」
「えっ？　聞いてるよっ！　えぇっと、なんだっけ由美？」
「ほらぁ、聞いてなかったでしょ！　クラスっ、一緒にっ、なれたらっ、いいねって！」
「そ、そんな大きな声で言わなくても分かるよ！」
江藤由美は文子の幼馴染で幼稚園時代からの仲だ。よっぽど縁があるのか、小学校では五回、中学一年、二年と同じクラスになっている。
「まったく、おとぼけさんなんだから。あたしがいなくても寂しがって泣いたりしないでよね」
「そんな、しないよぉ」
文子は大概こうやって由美にいじられていた。それが嫌というわけではなかったけれど、ごまかすように話題を変えた。
「ところで新藤先輩とはどうなってるの？」
「春樹？　相変わらずって感じかな。軽いイメージするけど案外根はマジメなんだよ。ギャップって奴に弱いんだよね、あたし。ははは」
由美はさらりと答える。文子はそんな由美を頼もしく感じていた。一人っ子の文子にとって由美は同学年でありつつ姉のような存在だった。何もかもが由美の方が大人びていて、羨ましいと思うことはあっても妬ましいと思うことは無かった。
「ところで文子はどうなの？」
「何が、どうって？」
不意の質問に戸惑う。
「何がってさぁ、誰かいないの？」
「えぇ？」
苦笑いするように由美が溜め息を吐いた。
「好きな人っ、居ないの？」
「あ、えっ？」
文子の視界に丁度その姿が飛び込んできた。
「……くん」
「えっ？　聞こえないっ」
「何でもないっ！」
そう言って文子は校門に駆け出した。
「ちょ、ちょっと！　待ってよぉ！」
慌てて由美が後を追う。
文子は彼にちらっと視線を送る。彼はいつも通りに沢山の友達に囲まれて笑っていた。文子は目を瞑ってその横を駆け抜けていった。
「ちょっと！　急に何？」
「うん、走ってみたくて」
「ふぅん」
文子はぎこちなく笑ってみせた。振り返ると彼の姿は無く、見失ってしまった。
「鮫島のこと見てた？」
由美が唐突に聞く。
鮫島竜之介。野球部のキャプテンで女子の人気も高い。
「えっ、いや、そんなんじゃないってば！」
「ふーん、そっか」
こうゆう時に突っ込まずにいてくれるのはありがたい。しかし、

文子は由美の観察眼に心底恐れ入っていた。いつからだろう。文子は、竜之介の姿を無意識のうちに目で追うようになったのは。
中学三年の新学期は、ぼんやりと春霞のかかった不思議な天気だった。皆が少し浮き足立っている。女子グループが円陣を組んでわぁわぁ騒いでいる。いかつい男子がゲラゲラ笑っている。文子は胸の高鳴りを抑えてクラス表に目を通した。
（葛城、葛城、っと。あった！ ）
自分の名前を見つけた瞬間、更に心臓が高ぶる。
「おっしゃ！ 竜之介、同じクラスだな！」
竜之介が白い歯をこぼし、友人とじゃれあっていた。男子グループの中で照れ笑いする彼の姿を遠目に見て、思わず心臓が高鳴る。
「文子！ 同じクラスだねっ！」
「えっ？ あっ、うんっ！」
文子は由美の喜声にうわの空で返事をした。不意に文子は竜之介と目が合った気がした。その時の文子には、薄ら明るい春霞が天使達のカーテンレールのように見えていた。

「合格おめでとう！」
ぼんやりとしていた文子の携帯が鳴った。由美の声を聞いて、文子も笑みがこぼれる。由美が自分のことの様に喜んでいる姿が受話器越しに見えるた気がした。
「ありがとっ、誰から聞いたの？」
「文子のことは何でもお見通しよ」
母だな、と文子は思った。文子の母親と由美の母親の間でおおよその情報は筒抜けである。
「由美はまだ仕事始まってないの？」
「うん、今日はまだ休み」
「そっか、久しぶりに会えない？」
「今日はごめんね、彼氏とデートなんだ」
由美と新藤がどうなったかは聞いていない。ただ、由美はいつ頃からかデートの相手をハルキとは言わずに彼氏と言うようになった。文子は自分の知らない、その彼氏が由美と一緒に歩いている姿を想像した。
「ありがとうね由美。今ね、久しぶりに昔のこと思い出してたの」
「昔？ 幼稚園の頃とか？」
「そんな昔じゃなくて、中学の頃とか。特に中学三年生の頃のこと」
「なるほど。鮫島のこと考えてたんでしょ。文子、鮫島のことばっか見てたよね。文子ってば、分かりやす過ぎ」
竜之介の名が出て文子はふっと息を吐いた。以前の様に動揺することは無くなったが、やはり反応してしまう自分がいた。
「それもあるけどね。由美、佐久間って覚えてる？」
「佐久間？」
由美の脳裏に彼がぱっと思いつかなかったのか、少し考えている様子だった。
「佐久間って、佐久間茂のこと？」
「そうそう、下の名前は私も覚えてないけどね」
「文子聞いてないの？」

「えっと、何が？」
「佐久間、死んだよ」
「えっ？」

ナイスボール！

バシっと小気味の良いキャッチング音が鳴り響いた。ふと窓から見下ろすと、校庭で少年達がキャッチボールをしている。文子はぼんやりと竜之介の姿を目で追っていた。
「なぁに、ぼんやりしてるのよ？」
「なんだ、由美か」
「なんだ、じゃないでしょ、部活行かなくていいの？」
「あっ、そっか、ヤバいっ」
文子は急いで教室を飛び出した。後ろで由美が手を振っている。文子は小柄なわりに「走る」という能力において秀でていた。彼女が自分自身を誇れる唯一の特技と言っても良かった。実際に短距離走では市内で賞状を貰うほどの成績を残していた。
文子はグラウンドを走る時笑みを浮かべていることがあった。誰もが文子のことを走ることが好きな少女としてしか見ていなかったし、文子自身もそう見られることに満足していた。佐久間に出会うまでは。
「葛城、お前走りながらいつも鮫島のこと見てるやろ？」
ニタニタ笑って文子に呟いた。

彼の名は佐久間茂。竜之介と同じ野球部だった。
文子はその日、いつものように運動場のトラックを走っていた。すると、不意に誰かが自分に叫んだ気がした。
「危ないっ！」
ほんの瞬きをするほどの瞬間、視界に白球が飛び込んできた。
えっ？　っと言う間もなく文子の頭に衝撃がはしった。
気が付くと文子は保健室のベッドの上にいた。
「起きましたか？」
小太りな保健の先生が事務的に問いかけた。
「あの、もう大丈夫ですから、戻ってもいいですか？」
「ダメですよ、あなた。仮にも当たり箇所が後頭部ですから、一応病院で検査することになっています。お母さんがお迎えに来ますからそれまで待っていなさい」
そう言い放つと彼女は保健室から出て行った。しんと静まり返る。校庭を見ると他の陸上部員が無心な表情で走りこんでいる。試合を間近に控えた文子はもどかしさに苛立った。もう一度ベッドに寝転がると後頭部の打ち所が今更ながらずきずきと痛み出した。
コンコンと扉をノックする音がした。部屋には文子の他誰も居ない。文子は寝たふりをしてそれを無視した。もう一度ノックがある。そしてガラリと戸が開けられた。
「失礼します」
やや無愛想な男子生徒の声。文子がカーテンの隙間から覗くと、野球部の帽子とユニフォームが見えた。竜之介ではない。

「なんや、起きてるんかい」
目が合ってしまった。同じクラスの佐久間だった。
「起きてんなら、返事してくれへんと困るわ」
佐久間は中二の春に関西から転校してきた。彼は野球部の中では一際体が大きかった。しかし高校生の不良グループとつるんでいるとか、恐喝をしているとか悪い噂が絶えなかった。おかげで女子からはめっぽう嫌われている。野球部の仲間内でさえ、妬みも多少あれど浮いた存在の様に文子の目には映っていた。
「なんで、佐久間がここに居るのよ」
「野球部の顧問に言われたからや。一応同じクラスやしな。好きで来とるわけなかろ？」
佐久間は椅子に腰かけると、落ち着きなく貧乏ゆすりや舌打ちを繰り返した。うつむき気味に視線を文子に向けたかと思えば、落ち着きなく視線をそらす。
佐久間は何を苛ついているのだろうか。その様子を見ていた文子は、なんだか無性に腹が立ってきた。
「佐久間が謝りに来ても全然嬉しくないんだけど。竜之介くんは？　竜之介くんも同じクラスでしょ？」
言ってしまってからしまった、と思った。佐久間はすかさず切り返してきた。
「せっかく来てやったのに失礼な奴やな。見舞いなんて一人で十分やろ。つぅか、なんでそこで鮫島の名前が出てくるんや？」
文子は返答に詰まった。顔が赤面するのが分かった。早く母親が来てくれることを心から祈った。が、佐久間は続けざまに質問をぶつける。
「鮫島のこと、好きなんか？」
「なんで、佐久間にそんなこと言わないといけないの？」
「好きか、嫌いか、そんなこと何で言えんのや？」
文子は黙った。佐久間も黙った。文子は佐久間がそのまま立ち去るのかと思ってじっと待った。しかし、佐久間は何やら考えている様子でそのまま椅子に座り込んだ。いつも見せることの無い薄ら笑いを浮かべている。なんだか手をもじもじさせて佐久間らしくもない。そしてさっきまでとは打って変わってぎこちなく話し出した。
「悪い、悪い。普通、俺なんかに言わねぇな。でも葛城、走りながらいつも鮫島のこと見てるやろ？　見え見えやで」
文子は顔を上げて佐久間の顔を見つめてしまった。
佐久間がこれだけ言葉を発していることが不思議だった。文子が驚いたような表情を浮かべると佐久間は満足したように鼻で笑った。
「図星か」
佐久間がぼそりと言った。文子の中でさっきまでの苛立ちが再燃してきた。
「あんたこそ、私のこと観察してたわけ？　やめてよね！」
佐久間は薄ら笑いを続けている。
そこに、文子の母親が迎えにやってきた。佐久間はすっと立ち上がって頭を下げた。
「野球部の代表としてお見舞いに来た佐久間と言います。この度は、文子さんにケガを負わせてしまいすみませんでした」
別人の様に頭を下げる佐久間に文子は面食らった。無粋なくせ

に礼儀はわきまえているんだな、と文子は少しだけ感心した。
佐久間が保健室を去ると文子の母親が文子に呟いた。
「佐久間君だっけ、しっかりした子ね」
「さぁ……どうだか」
文子は病院に行き検査を受けた。異常は見あたらないと診断され、母親は胸を撫で下ろしていた。
けれど、佐久間に見透かされていたというわだかまりは思いのほか深刻だった。
文子は次の日仮病休みをした。しかし、仮病のつもりが本当に熱を出してしまい、三日間も休むことになってしまった。佐久間が薄ら笑いを浮かべて自分の秘密を言いふらしているような気がした。そんな被害妄想にとりつかれ悪い夢ばかりを見続けたのだった。

「文子、聞いてる?」
文子はうわの空で窓から公園を見下ろしていた。少年達がキャッチボールをしている。小学校高学年くらいだろうか。華奢な体つきの彼らの中に、勿論佐久間の姿は見当たらなかった。
「ご、ごめん! ちょっとびっくりして……」
「まぁびっくりするよね。同級生が、なんて信じられない感じはするけど」
「死因はなんだって?」
「交通事故だって。原付で信号無視して突っ込んだらしいよ。佐久間らしいな、言っちゃ悪いけど」
由美が「佐久間らしい」などと言うものだから彼がまるで私達のクラスに馴染んでいたかのように錯覚する。しかし、実際はそうではなかった。
「でも、何で今更になって佐久間のことなんか聞くのよ?」
「うぅん、色々あって」
「色々? 文子、実はあいつと深い関係だったりして」
「ち、違うよ! ただ、色々あって」
「気になるじゃんか。良い子だから、由美お姉さまに話してごらんなさいよ」
由美はいつだって、人の心の壁を易々と溶かしてしまう。それを八方美人だ、と陰口を言う人も居た。しかし、文子にとってはそれが由美以外には許されない特殊な能力であるように感じられた。
文子は受話器に向かってわざとらしく咳払いしてみせた。向こうからは何も聞こえてこない。聴く体勢を作っているのだと文子は理解した。
「しょうがないな、負けました」
「ありがと、話せるとこだけでいいからね」
「うん、実はね」

結局、佐久間が文子のことを言い触らすことは無かった。というか、それだけの友達が彼の周りに居なかった。改めて佐久間の

周囲を観察すると、思った以上に孤独であることが分かった。
梅雨入りを迎えた五月下旬、クラスの雰囲気が固まり始めたところで修学旅行というイベントを意識し、クラス委員達がせわしく動き出した。由美はクラス委員のメンバーだった。班決めのあみだクジの時、由美は文子の耳元にそっと囁いた。
「右から二番目」
文子は口の形だけで、やめなさいよ、と伝えたが内心は嬉しかった。多少のズルをしても由美と一緒のグループならきっと素晴らしい修学旅行になるだろうと思った。
「じゃあね、グループ発表するよん！」
由美が悪戯心有り気な笑みを浮かべている。
「一班、……二班、佐久間、……」
チラっと佐久間の顔を見る。相変わらずムスっとした顔をしている。二班のメンバーになった人達はあからさまに失敗した、という表情を浮かべていた。
「三班、江藤、……四班……」
（あれっ？）
文子が由美を見ると白々しく口笛を吹いている。竜之介はあまり関心が無いのか、問題集を片手に黒板を見つめていた。
「五班、鮫島、……葛城」
文子は緊張していた。由美の策略によって文子は竜之介と同じ班になってしまった。班としての最初の話し合いは自由行動時間にどこに行くか、というものだった。
「俺はみんなが行きたいとこだったらどこでもいいよ」
竜之介が笑って言う。それに甘えるように皆が予定もルールも無く勝手に意見を出し始めた。
「竜之介くんはどこか行きたい所無いの？」
文子が恐る恐る尋ねる。
「うぅん、俺は本当にどこでもいいんだけどな、葛城はどっか行きたい所無いの？」
逆に質問された文子は放心状態になった。
「え、えぇと私はお台場とか行ってみたいな、なんてね、アハハ」
お台場は合同で行くから無し、というメンバーの声も文子には届いていなかった。
佐久間に呼び出されたのは、その日の部活終了後だった。梅雨まっさかりで、じとじとと小雨の降る嫌な日だった。昼休み中、文子が一人で居るところへ突然現れ、部活終わったら話あるから体育館裏に来い、と言ってきた。有無を言わさぬもの言いに返事も出来ず、佐久間も文子の返事を聞かずに立ち去ってしまった。返事をしなかったのだから行かなくたっていいんだ、と文子は自分に言い聞かせてみる。しかし、なんだか恐ろしくなって結局来てしまった。佐久間は体育館裏の渡り廊下に寝そべって待っていた。
「遅ぇよ」
むっつりとした表情で彼は言う。文子は意を決して叫んだ。
「ごめんなさいっ、佐久間とは付き合えません！」
佐久間がむくっと起き上がる。
「何のことや？」
「だ、だから、付き合うのは無理って！」

「何言ってんねん、こないだの話の続きに決まっとるやろ」
「えっ！　？」
「だからっ、こないだの続きやて」
佐久間がじっと文子を見つめる。あまりに凝視するので文子は目のやり場に困った。しばし沈黙が流れた。小雨のぱらつく音と遠くで鳥達がさえずる声だけが湿っぽく響いた。
「葛城は鮫島のこと好きなのか？」
「そう、だって言ったら？」
「俺は好きか、嫌いかって聞いてんねん！」
思わず佐久間の気迫に押され、消え入りそうな声で文子は言った。
「……好き」
「分かった、ちょっと待っとれ」
佐久間はがさごそと形の崩れた通学カバンの中から何か取り出した。
「これ、知ってるやろ？」
取り出したのは、最新のＰＳＰと幾つかのソフトだった。
「そりゃ知ってるけど」
「結構、面白いんだぜ」
「だ、だから何なの？」
佐久間は自らの説明不足に気付いたのか、その理由を語り出した。
「鮫島、ゲーマーやんか？　ああ、知らんかったならそれでもいいけど、付き合いたいならお前もゲーマーになれ」
あまりに短絡過ぎる彼の言い分に、文子は唖然とした。
「そんな単純な話ってないでしょ！」
「単純に聞こえるかもしれへんが、これが事実や」
佐久間はまくし立てた。
「同じ野球部に居るのやから鮫島と話すこともある。大概の噂は耳に入ってきとる。あいつはな、自分のこと好きっていうだけで近寄ってくる女とは絶対付き合わへん」
「本気で言ってる？」
「ああ、本気や」
佐久間の顔は本気だった。というか冗談を言えるタイプの人間で無いように見えた。仮に間違っていても本人は信じ込んでいるんじゃないだろうか。
「別にな、ゲームマスターになれって言うてる訳やないねん。ちょっとかじってみるだけやて。少なくとも今の葛城じゃ鮫島の気は惹けんと思うわ」
文子は少しムッとした表情を作った。ブスだとか言った訳じゃねぇだろ、とぼそぼそ呟いて続ける。
「とりあえずこれやな」
取り出したのは文子も聞きなれたゲームだった。
「ぷよぷよ？」
「そや、ぷよぷよや」
力説する佐久間が次第に滑稽に思えてきた。
「自分、馬鹿にしとるって顔やな」
文子の心中を見透かしたように佐久間が呟いた。
「えー、だってさぁ。ぷよぷよって……」
子供っぽい。口先まで出かかった言葉を押しと止める。

それを言ってしまったら、竜之介を否定してしまったことになる。
「最近の鮫島、馬鹿みたいにゲームやるんだぜ。学校にもこっそり持ってきてるらしい。野球終わったらゲーム、ゲーム、ゲームって感じらしいわ、いや、知らんけどな」
文子には、そうゆう竜之介を想像することが上手く出来なかった。いつも友達に囲まれてにこにこ笑っている姿しか思い浮かべることが出来ない。
「葛城はあいつの良い面の方を見すぎや。まぁそれが好きってことなのかもしれんが。俺の知ってる鮫島は、葛城が思ってるよりドライでクールで醒めてて、そんでもって自分にしか興味の無い奴だ」
「何それ、ひどっ」
「俺がそう思うって言ってるだけや。葛城が好きって言うなら止めはせん」
「あのさ。なんで、そこまで私に構うわけ？」
文子が気になっていたことを思い切って聞いてみた。するとからかい口調で佐久間は言った。
「俺なりの愛やねん」
「あぁ、えぇっと。ありがと」
文子は冗談とも本気ともつかない佐久間の言葉に、思わず後ずさりしてしまった。
修学旅行当日、文子は佐久間から無理矢理押し付けられたＰＳＰとプヨプヨを持参してきてしまった。佐久間は言っていた。
「二人っきりになったらな、ええ雰囲気の会話しようなんて思うなよ。ゲームの話しろ、ゲーム」
文子は楽しそうにみんなと笑い合う竜之介を見て、自分は佐久間に騙されているのだろうか、されているに違いない、だがしかし自分が竜之介くんの何を知っているのだろう、と自問自答した。
私は佐久間のことを結局のところ何も知らない。
あの頃の私は、自分のことで精一杯で、自分にかけられた言葉が何を意味するのか、何を思ってかけられた言葉かなんてことを考える余裕すら無かった。
「修学旅行って佐久間が疑われた時だよね」
受話器越しに由美が確認する。
「そうだね」
修学旅行当日、お土産売り場で文子は竜之介と二人になるタイミングがあった。文子は必死に付け焼刃のゲーム知識を駆使し、竜之介に話題を振った。驚くことに彼の反応は予想以上に良かった。むしろ専門的なことにまで突っ込まれて、文子が笑ってごまかすことの方が多かった。竜之介に関心がないであろうことを話題にすると文子がいつも知っている竜之介の表情になった。文子は少しだけ佐久間が言っていたことが腑に落ちた気がした。竜之介は笑ってごまかすのが上手いのだ。そして幸か不幸か、その笑顔は多くの人を魅了してしまう程チャーミングだった。
そんな風に文子達が楽しんでいる最中、ちょっとした事件が起

きていた。二班で財布の紛失があったのだ。誰が問い詰めるでもなく、真っ先に佐久間が疑われた。

他の班にそれが伝わったのは修学旅行最終日のことだった。文子が知ったときには既に佐久間が犯人であるかのような扱われぶりだった。佐久間が現金で一万円札を持っていたのを見た、というたったそれだけの証言の為に。

教師達は皆の前で佐久間を言及するようなことはしなかったが、明らかに彼を疑ってかかっている様子だった。

文子は班員に責められている佐久間をチラッと見かけた。佐久間は薄ら笑いを浮かべ、

「盗ってねぇよ、いや、ほんまに」

まるでジョークを言うように佐久間は薄ら笑いを浮かべていた。

彼がそうゆう表情をするのは、心底焦っている時だ。周囲の人から見たらふざけているように見えるに違いない。

佐久間は文子の姿を見ると、照れ隠しに笑ってみせた。

「うぃっす、鮫島とはどうなった？」

つくづく笑顔が似合わない顔だな、と文子は思う。

竜之介くんとは正反対だ。

「おい、どうなったかって聞いてんねん？」

自分が追い詰められた状況の中、よく他人のことまで気にかけられるものだと文子は思った。

「わりと話せた、話せたけど、無理だよ。こうゆうのって難しいね、あはは」

文子はごまかした。もう、竜之介に告白などできる気がしなかった。文子は、俯きながら言った。そして、出来るだけ笑顔を作って顔を上げたつもりだった。

えっ、と声が漏れそうになる。佐久間は顔を真っ赤にし、奥歯を噛みしめているのが分かった。今まで見たことも無いくらい彼は怒っていた。

「なぁにウダウダ悩んでんねん！　もう勝手にしろっ！」

それが文子が聞いた彼の最後の言葉だった。

佐久間は修学旅行が終わると、一切学校に来なくなった。不登校なのか出席停止処分だったのか、文子には知る由も無い。教師は何も言わなかった。

ただ彼の貸してくれたゲーム機だけが返す機会もなく、ポツンと文子の手元に残った。

「佐久間、本当は自分が文子とゲームしたかったんじゃないかな？」

静かに聴いていた由美が呟く。

そうかもしれない。そうじゃないかもしれない。

正直、文子には彼がどんな気持ちで自分に接していたか、いまだに良く分からない。

荷物運びの途中だったのに部屋は散らかったままだ。

文子は古ぼけたゲーム機を握り締めたまま、動くことが出来なかった。気付いた時には、そのスイッチを入れていた。スタート画面が映し出され、当時の色彩が鮮明に蘇る。淡く残された、彼

の思い出と共に。＜おわり＞

Туман
トゥマーン
Vol.2

氷川省吾

登場人物

ロシア陸軍　第３２独立自動車化狙撃師団

ユーリ・メリニコフ……兵長　先任ライフル射手

ジーマ・マカロフ……ライフル射手

ヴァシリ・ジューコフ……小隊選抜射手

セルゲイ・モソロフ……軍曹　分隊指揮官

ディミトリ・クズネツォフ…機関銃手

ヴァディム・グラズノフ……機関銃手補佐

ミハイル・トレチャコフ……対戦車火器運用手

ゲオルギー・セヴィン……対戦車火器運用補佐

レーニャ・メリニコフ……少尉　小隊長

レフ・ボロディン……兵長　歩兵戦闘車砲手（BMP）

アントン・コズロフ……歩兵戦闘車運転手（BMP）

リュダ・フェドチェンコ……内科医

イロナ・イワノヴァ……リュダの姪

ニキータ・メットレル……看護師

ボリス・ムソルグスキー……病理学者

幕間2

患者移送報告

医療施設から〝ベクター2〟への移送は問題なく完了。移送には国家親衛隊によるMi‐8ヘリコプターが用いられ、患者A～Cには鎮静剤を投与の上でベッドに拘束し、ビニールテントと空気循環システムを装着した上で、機体に搭載された（使用したシステム、および鎮静剤の種類・量については添付資料を確認の事）。

患者Aは蘇生後に電気製品、およびコンセントへの走性を見せた。バイタルは非常に低レベルではあったものの、安全のために鎮静剤の投与を行ったが、基準量を投与しても行動に変化が見られなかったため、そのまま拘束の上で移送を開始した。

移送中においても、主に最も間近にある空気循環システムへの関心を見せ、人間へは認識していないかのようなそぶりを見せたが、移送開始から約20分後には活動が鈍化し、硬直状態に陥った。この時点でもバイタルは低位ながらも変化はなかった。

（移送中における各患者のバイタルの変化は、報告書末尾に記載）

到着後検査報告

ベクターB到着後、患者A～CをBSL‐3レベルの検査ラボへと移送。患者Bは到着後40分、Cは50分後に覚醒。自分の置かれた状況に強い不安を見せ、感染症の可能性には動揺したものの、自分が主たる検査対象でないことを知ると不安をある程度やわらげた。Bは感染以外の金銭的な面での不安を抱いていたが、補償が受けられることが説明されると納得の姿勢を見せた。B、C共に、検査へは協力的。

患者Aは依然として硬直状態が継続。問いかけへの反応はなし。瞳孔反射、バイタルは確認できるが、きわめて微弱。体温は周囲気温とほぼ同じ。血液検査内容は添付資料1にバイタルと共に記載。

病院での検査で確認された脳の角質化を検査するため、CT及びMRIの実施が決定された。傷口に付着していたとされる黒い物質は、移送前に病院において取り除かれたとされているが、依然として付着している。患者の傷口において生成されているか、頭蓋骨内部から発生している模様。感染源の可能性を考慮し、患者をチャンバー内に隔離した。

CTを実行したところ、患者の脳において病院での検査での報告と同じ、角質化に似た変化が発生していることが確認された。範囲は報告よりも拡大しており、脳の一部が硬膜と癒着し、頭蓋骨内壁とも接触していることが判明した。

CTでも検査を行ったところ、硬直状態であった患者が活動を急激に再開。全身の痙攣運動が発生した。MRI終了後は電気機

器への強い走性を示すようになった。この時点においても、やはり人間への興味・認識はない。
（走り書き――電磁気に反応している？）

患者Aを隔離チャンバーに収容してから2時間後、チャンバー内の空気汚染と循環システムの作動不良警告が出た。到着した職員より、チャンバー内に白いエアロゾルあるいは気体が滞留していることが報告された。

モニタリングシステムにより、警報の発令より5分程度前から、患者の頭部付近から何らかの物質の放出があったことが判明した。放出物が白いエアロゾル、または気体である可能性が高い。

モニタリングシステムにおいては、チャンバー内の物質は既知の有毒物質とは一致せず、有機物ではない事が示されている。フィルターを交換の上、回収した物は分析に回された。

到着した職員が確認のためにHAZMATスーツ装着の上でチャンバー内に入室したところ、患者が職員に対して顔を向け、その存在を知覚しているかのような反応を見せた。職員からの報告では、ベッド上に拘束されていなければ自分たちの方に近づいてきた可能性もあったとのこと。意識の回復が期待されたが問いかけには反応がなく、職員がチャンバーから退出した後は、その姿を認識できなくなったかのようにチャンバーへ入る前と同じ状態へと戻った。

また、患者が動こうとした際に職員が拘束用ベルトの状態を確認したところ、ベルトの金具表面に、ごく小さい黒い錆び状の物質の付着が確認された。

金具はステンレススチール製ではあり、確認された物と同様の外観をした錆が生じる可能性は小さい。こちらもサンプルを採取の上、フィルターと同様の検査に回す予定。
（走り書き――傷口のサンプルと比較するべき）

第二章

オリーブドラブ色に塗られた分厚い防弾鋼板の壁。その中央部分だけが、白く変わっている。高さ1．5m、幅1m前後の、角が丸い四角形。その場所にはドアがあったが、今はちぎり取られ、ちぎれた肉片のように捻れた蝶番の残骸が残っていた。

くり抜かれた空間から先には、ひたすらに白い闇が広がっていた。地吹雪が怒った時のホワイトアウトや、濃霧に似ていた。質量はないが粘性を有する物質が空間を占有しているような、まとわりつく気配だけを持つ闇だった。

ユーリはAKから外していたシャヒン暗視照準器を目に当てて、霧――便宜的にそう呼んでいた――の向こうにある物を見ていた。物体が発する遠赤外を可視光へと変換した光景が、灰色の濃淡となって表示されている。

灰色の世界の中で、雪に覆われた地面が手前から向こうへと流れていくのが見える。正しくは、ユーリが後ろに向かって移動している。

ユーリたち第1分隊を乗せたBMP‐3M歩兵戦闘車は、ウマの駆け足にも劣る速度で東へ走り続けていた。主砲は発射できず、砲塔も動かず、さらには方向転換する機能に加えて後部ドアまで失い、履帯が付いた鉄の箱になっている。そうなっても、第1分隊はこの車両を走らせなくてはいけなかった。

ユーリたちがやってきた西側からは、くぐもった爆発音が雷鳴のように聞こえていた。かすかにではあるが、北や南側からも同じような音が届いてくる。ユーリが属する第1小隊を切り刻んだ〝あれ〟が、他の部隊を蹂躙しているのだ。

爆発音は兵士が戦っていることを示しているが、おそらくは大した意味をなさないだろう。戦車、歩兵戦闘車、攻撃ヘリ、地雷、様々な銃、対戦車ロケットランチャー。迫撃砲に対戦車火器。それらが容易く突破された。他の部隊なら勝てると思うほど、ユーリは現実が見えないわけではなかった。

前線が突破された以上、残されているのは後方部隊だけだ。大隊を戦う一つの体として機能させるための、500人以上の兵士達。ユーリら120人の自動車化狙撃中隊が銃を持つ手であるとすれば、彼らは内臓であり血管であり、頭脳であった。必要不可欠な存在だが、正面切って戦う役割とは違う。

〝あれら〟は装甲車両からの砲撃をものともせず突進して、地雷と鉄条網を突破し、完全武装した兵士をひき肉へと変えた。奴らを前にすると攻撃ヘリは前触れなく墜落し、BMPの兵装システムは壊れた。遂には戦車を踏みつぶすサイズの代物まで現れた。

そいつらが押し寄せた時、司令部と、工兵、統制、衛生、保障の各小隊はどうなるか。結果は分かり切っている。ストロガノフに使うような細切れ肉に変わる。牛肉ではなく人肉だが。

まだかすかに聞こえてくる戦いの音は、これから解体されて枝肉になっていく、第1自動車化狙撃大隊という牛の命の残り火のようなものだった。その断末魔が誰かに届く望みは薄かった。周囲に満ち溢れている〝霧〟によるものかどうなのかは分からないが、無線を利用したあらゆる通信機器は機能不全に陥っている。

部隊は外部と連絡を取り合う声と耳を失い、戦うためを腕砕かれて引きちぎられ、今は内臓と頭に牙を立てられている。それぞ

れの兵士だけでなく一個大隊そのものが、訳の分からない化け物によって、文字通り食い散らかされている。
ユーリたちは引き裂かれた腕から、偶然にちぎれた一本の指のようなものだった。生き残るためにできることは、体の他の大部分が喰われている間に、なるべく遠くへと離れることだ。行き先が、化物どものやってきた方角だとしても。
赤外線装置の中で、後方へと流れゆく地面の速度が遅くなっていた。やがて勢いを失い、軽い慣性と共に停止してしまった。どうやらここまでの様だ。
ユーリは暗視装置で、自分たちがやってきた方向を見続けた。通常なら、暗闇や濃霧の中でもそれなりの距離まで見通せるはずだが、地形は１５０ｍほど先しか見えない。この〝霧〟の正体が、大気を漂う氷や水の粒ではないことを示している。
１０秒ほど眺めていたが、急速に近づいてくる異形の影も、足音もない。ひたすらに静かだった。追いかけてくる奴はいないらしい。少なくとも今は。
ユーリは暗視装置から目を離した。隣にはディミトリがＰＫＰ機関銃を外に向けている。銃の上には、ユーリが使っているものと同じシャヒンが取り付けられていた。
ユーリは今までの速度と時間から、元居た場所から２．５ｋｍほど東に来ていると推測した。左右には林がある様子からすると、林を切り開いて作った道に入ったらしい。このややこしい事態のきっかけとなった、例の〝施設〟へ続いている道路だ。
地面を覆う雪はひどく乱されている。あの百鬼夜行のごとき行進がここを通ってきた証だった。大隊司令部をデザートに平らげた連中が、帰りに同じルートを選択する可能性は高い。そうなれば、ユーリたちもいずれ同僚の後を追うだろう。
遠くの戦闘音も、今はほとんど聞こえなくなっていた。どれほど死んだだろうか。生き残った者はいるのか。
ユーリは自分が悲哀か何かを感じるかと思ったが、それを抱くにはあまり人つながりが希薄だった。知り合いは自分の正体以外には両手で数えられる程度だ。心理的にも距離的にも、他者の死はあまりに遠かった。
さて、ここからどうするべきか。ＢＭＰに乗るように皆に促したのは自分だったが、一時的に危機を乗り越えた後にどうするかを決めるのは自分ではなかった。ただ、誰が何を決めたところで、いつ死んでもおかしくない状況にあることは変わらない。ひとまず上の人間――レーニャかセルゲイ――が何かを言ってくれるのを待つのが正しいだろうか。
そう思った時、運転席の方で怒鳴り声が響いてきた。
「何でこっちに来た！」
砲手のレフが、運転手のアントンを怒鳴りつけていた。
「ステアリングがイカレたって言ってただろうが！　あのまま、あそこで止まってたらよかったのか？」
「バックすりゃよかったんだ！　連中がやってきた方角に真っすぐ突っ込んでいくアホがいるか？」
「バックしたらそのまま追いつかれて、あんたも今頃はミンチになってただろうよ。後になってガタガタ抜かしやがって」
まっすぐ進んで、怪物どもがやってきた〝研究所〟の方に行かなくてはならなかったアントンに、レフが怒りをぶつけている。

今の状況は誰かのミスで生じたわけではないが、誰かにその責を負わせたくなる人間の性が現れていた。

「お前ら、いい加減黙れ！」

高まるののしり合いの声を叩き潰すように、セルゲイが一喝した。ユーリは兵員室内を振り返った。

白一色の外とは異なり、室内には様々な物があふれていた。両側の壁に向かい合う形で設置された3つずつの椅子は、1つを除いてすべて畳まれている。白い床には機関銃補佐のヴァディムが寝かされ、腕の手当てを受けていた。

その右腕の肘から先は失われ、行き場を失った血が、白い擬装服や床をどす黒い赤色のまだら模様に染め上げていた。ジーマが肘のすぐ上に、服の上から黒い止血帯を巻き付け、付属のロッドを動かして締めあげている。ヴァシリは傷口に止血パッドを何枚も貼り付けていた。

ヴァディムはフェイスマスクとヘルメットを脱がされ、顔があらわになっている。四角く頑固そうな印象を与える顔は、今は蒼白になって視線を宙に泳がせ、口を半開きにして震えていた。意識は失っておらず、失われた腕の断面から目をそらして天井を見つめている。

左側の奥、唯一上げられていない座席にはレーニャが座っていた。フェイスマスクを脱いだ顔はこわばり、真っ赤に染まった左手を右手で押さえている。ネズミのような化物に食いつかれた手はほとんど2つに裂け、指が3本無くなっている。上から止血パッドを押し当てることで出血は止められたが、痛みを止めるモルヒネはなかった。それを持っていた衛生兵は第3分隊と共に行動していた。今は死体になっているだろう。

言い合いが怒っている操縦席側の様子は、兵員室からは見えない。ユーリが兵員室の様子を見ていると、ヴァディムと目が合った。

その途端にヴァディムが目を見開き、勢いよく身を起こしてユーリにつかみかかろうとしてきた。慌ててジーマが抑えるが、半分になった腕をふりまわして暴れ続けた。止血帯がずれ、止血パッドが1枚剥がれた。

「ユーリ！　このドぐされが！　俺の腕を！　くそが、俺の腕を！」

ヴァシリとジーマが二人がかりで押さえつけるが、ヴァディムの罵り声は止まらない。ユーリはヴァディムの足元に言ってしゃがみ込み、その顔を覗き込んだ。

「そいつは悪かったな。腕がちぎれるより死んだ方が良かったか」

ユーリはAKを持ち上げ、銃口をヴァディムの眼前に突き出した。周りの全員が目を向いてこちらを注視したのを肌で感じた。

「放っておかずに腕をふっ飛ばしたのは間違いだった。今からでも遅くないだろうから、謝るついでに死なせてやるよ」

「おい、やめろ！」

「兵長！」

ジーマとレーニャが声を上げたが、ユーリは銃口を外さなかった。ヴァディムは喚くのをやめ、目を剥いて自分に向けられた5.45mm口径の銃口を見つめていた。

「このまま盛ったメス猫みたいに喚いていたら、その内に出血でくたばる。だったら、さっさと頭をぶち抜くほうがいい。違うか？」

誰も声を上げなかった。下手に止めれば、ヴァディムの頭がスイカの様に粉砕されると思っている。
「死にたくないなら、大人しく静かにしろ。これ以上喚くなら、血が全部出て死ぬ前に俺が殺してやる。どっちか選べ」
ヴァディムは答えることなく、視線をユーリの顔と銃口の間にあわただしく行き来させていたが、やがて震えるように頷き、慌てて横に振った。
ユーリは銃口を外した。
「おい、何事だ？」
砲手と操縦手の言い合いを黙らせたセルゲイが、兵員室の騒ぎを聞きつけて振り向いた。
「ヴァディムを落ち着かせただけです」
ユーリは誰かが何かを言う前に答えた。少なくとも嘘は言っていない。
「止血帯をもっと締めろ。8枚も着ているんだ。少しじゃ役に立たん。足りなかったら後ろにもう1本追加しろ。救急箱も出せよ。圧迫包帯があっただろ。上から当てて圧迫するんだ」
ヴァディムが動きを止めている内に、ユーリは応急手当講座で習った内容を脳からひねり出して、そのまま言葉にした。早めに立ち直ったジーマが止血帯のロッドを動かして締めあげ、応急処置の続きを始めた。ミハイルが物入れから救急箱を見つけ出し、ヴァシリが包帯を受け取って、ヴァディムの断裂した腕の傷口を覆う被覆材の上から巻き付け始めた。
それを見届けた時、運転席の方からセルゲイが声を掛けきた。
「ユーリ、レフ、少し外に出るぞ。少尉、動けますか？」
「大丈夫だ。私も出る」
レーニャがうめくような声で答えた。
「他の連中は手当と警戒だ。やばくなったら運転席の方に立籠れ。入り口から距離を取るんだ」
そう言って、頭上のハッチを開けてセルゲイが外に出た。レフも同じようにハッチを上げて出たらしい。ユーリとレーニャは、ドアの無くなった後部出入り口から外に出た。
外の空気は、兵員室の中よりもさらに重いような気がした。白いスクリーンの向こうに〝あれ〟が牙をむいて、こちらの頭を咬みちぎろうとしているかもしれない。その考えが、頭の中をひりつかせるような不快感を生み出しているのだろうか。
レーニャと共にＢＭＰの側面に回ると、セルゲイとレフがやってきた。セルゲイはユーリとほぼ同じ装備を身に着けていたが、体格がかなり良いせいでシロクマが武装しているような姿となっていた。あだ名も「クマ（ミドヴィエーチ）」だった。レフの方はひょろ長い姿で、セルゲイの横に立つと、着膨れしていても針金のように見えた。白色の６Ｓｈ１２２擬装服は着ておらず、緑の戦闘服のままだった。ヘルメットは張り出しが無い車両搭乗員用のヘルメットを被り、大きなヘッドセットをつけているせいで、頭部が丸く見える。緑色をしたマッチ棒の様だった。
「分かってると思うが、これからどうするかって話だ」
セルゲイが開口一番に切り出した。
「普通にドンパチやってる現場なら少尉か俺がさっさと決めるんだが。あれだ、〝普通〟じゃないからな。留まるか、それとも動くか。動くんならどこに行くか。すぐには考えられん」

そう言って周囲を見回した。状況はまさに周囲の光景と同じだった。何も見通しが立たない。

「他の道路を封鎖していた部隊と合流する」

レーニャが最初に提案した。模範的な考えだが、今は無意味だった。

「そっちからも戦っている音がしていました。今はもう聞こえませんが。俺たちと同じ連中を相手にしたなら、どうせオチは同じでしょう」

ユーリは自分が兵員室の入り口で耳にしていた音から推測される、自分たちの大隊の末路について話した。自分たちは、体から切り離された指先の肉片のようなものだ。

生き残るためには、状況はあまりにもユーリたちに不利だった。場所は真冬のシベリアのど真ん中。うずたかく積もった雪をかき分けながら移動するのは、あまりにも遅く、体力を消耗する。通信機器は一切が使用できない。あの化物どもがいつこちらに引き返してくるか分かったものではない。何より、腕がちぎれた怪我人がいる。

このままＢＭＰに立て籠もる。安全そうな方角に向かって歩く。大型の奴が入り込みにくい森の中に逃げ込む。何もない場所を与太付きながら歩く無力なエサになる点は変わらない。

「どっか隠れられる場所でもあればな」

セルゲイがつぶやいた。ユーリはすぐにそんな場所を思いついた。

「東に進めばあります。多分５００ｍも行かないうちに」

３人はユーリの言った意味を理解しかねていたが、すぐにわかった。

「おい、正気か？」

レフが呆れたように言った。そちらに向けてＢＭＰを走らせたアントンを散々にののしった以上、信じられない物を見る目つきでユーリの方を見ていた。

「危険すぎる」

レーニャも同意したが、セルゲイは考え込んでいた。

「賭けだな」

「食料と医薬品は絶対にあるでしょう。生存者がいれば、立て籠もる場所が手に入る。人間がいなくても使える車があれば、最悪でもそれなりに逃げられるはずです」

「あいつらがぎっしり巣くってなければな」

レフが最大の懸念材料を指摘した。

「だから今がチャンスかもしれない。今はかなりの数が出払っているはずだからな」

ユーリはセルゲイとレーニャを順番に見た。セルゲイが頷き、ややあってレーニャも首肯した。

「車両を放棄する。全員で東の施設へと向かう」

装甲車から出て、化物どもがやってきた方へと向かう。その決断には誰もが恐怖を覚えたが、この場にとどまって生き延びられる望みが薄いことは、まぎれもない現実だった。何もしない時間が長く続けば恐怖が募る。恐怖が募り続ければ、なおさら動くのが難しくなる。

時間の余裕もない中、ユーリたちはそれぞれの行軍用バック

パックと、使えそうな物をありったけＢＭＰから持ち出した。ヴァディムは担架に乗せ、アントンとレフが前後を持った。荷物は分担し、セルゲイが機関銃の補佐をすることにした。ＢＭＰの副武装として搭載されていたＰＫＭＴ機関銃には１５００発以上の弾薬が残されていたので、それも持っていくことにした。機関銃はディミトリが持っている１丁しかないが、山ほど撃ちまくれるのは都合がいい。

ユーリも自分の１８リットルサイズのパトロールバッグを引っ張り出した。中には手袋と靴下、下着の替え、３日分の携行食、寝袋、その他生存に必要な物が入っている。予備の弾倉と手榴弾も入れていたので、取り出してベストのポーチに補充した。普通なら作戦１回分は持つ量だが、車ほどもあるサイズの怪物の群れを相手にしては、あってもなくても変わらなかった。クマを相手にしたネズミの前歯を１本補充したところで、ネズミ本人の安心感以外に増える物はない。それでも、その安心感はないよりましだと言えた。

他に武器になりそうなのは、塹壕やタコツボを掘るのに使う、長さ５０ｃｍの６Ｅ５ショベル。木製の柄に５角形のブレード。１００年以上前からデザインがほとんど変わっていないそれは、ブレードの部分を入れるカバーをバックパックの表面に取り付ける形で携行するようになっていた。

アメリカの物と違って折り畳みが出来ないが、手斧のようにつかう分には都合がいい。ブレードの縁は砥石で刃物並みに鋭く研いである。赤軍時代からのロシア人兵士の最大の武器で、現代でも特殊部隊の接近戦闘の得物だ。

最後に、セルゲイが緑色をした長さ８０ｃｍほどある筒を渡してきた。使い捨てのロケット弾発射器、ＲＰＧ-２６（アグレン）。グラスファイバー製の筒の中に最初からロケット弾が入っており、撃った後は再装填できないのでそのまま廃棄する。ミハイルが使うＲＰＧ-７よりも威力と射程に劣るが、使い捨てなので重さが３ｋｇ程度になっている。

一発限りとはいえ、厚さ１ｍの鉄筋コンクリートの壁を撃ち抜ける火力を持てるのはありがたかった。４本あったので、ユーリとジーマが１本ずつ、セルゲイが２本持った。

そうした準備は５分とかからず終わった。特に言葉もないまま、ユーリとジーマが斥候として前に出た。残りは怪我人を中心にして、約２０ｍ離れて追随する。無線が使えないので、手振りを暗視装置で見て連絡を取り合うことにした。どこに何がいるか分からない状況で、声を張り上げて話し合う愚を犯す兵士はいない。兵士でなくてもやらない。

後続の準備が完了したのを確認し、ユーリとジーマは東に向かって歩き始めた。銃に装着した照準越しに霧の向こうを見通しながら、耳を澄ませ、何かあれば森の中に飛び込めるように道の端を歩く。聞こえるのは雪を踏んでは足を引き抜く音と、葉の落ちた針葉樹の枝がわずかな風に揺れる音だけだ。極寒の環境にもかかわらず、フェイスマスクの下で汗が滲み、自然と息が荒くなるのをユーリは感じだ。

歩くうちに時間の感覚は失われていった。肉眼では形ある物の姿が何も見えない、ひたすらに白い空間。音らしい音はなく、距離の概念もなく、時間さえも消え、無限に続く白。人間がこの中

に居続ければ、思考はいずれこの白と同一になり、遠からず発狂に至るかもしれない。脳から情報という情報が失われていく。

１０分だったのか、それとも2時間か、あるいは１００年ばかり経過したのかも分からない時間が過ぎた時、ユーリの照準器の中で森が途切れ、それまでとは違った人工物らしき影が見えた。

ジーマの背を叩いて合図し、同じものを確認したジーマが、手を上げて背後へ合図を送る。暗視装置で返事を確認したジーマの合図を受け、ユーリは前に進んだ。

太い支柱の間に張られた金網が道に沿って並んでいる。上にはユーリたちが陣地で設営した物と同じような、カミソリ府ワイヤーで作られた鉄条網が置かれている。根元は雪に埋まっているが、支柱が埋め込まれている土台はコンクリートでできているらしい。車で突っ込んだぐらいでは壊れそうにないが、少なからぬ数の支柱がへし折られ、なぎ倒されていた。

倒れている向きは内側からだった。化物どもはこの道以外の方向から施設に入り込んできたらしい。あるいは、施設の中から湧いて出たか。

ユーリは倒れたフェンスを乗り越え、敷地に足を踏み入れた。中と外で何か違いがあるわけではなかったが、赤外線で見ると建造物の影を見て取ることが出来た。あまり大きくなく、平屋の一軒家ぐらいだった。

生存者がいるかもしれないという期待は持てなかった。それより、小型の奴が潜んでいてもおかしくない。

近づいていくと、建物はひどく破壊されているのが分かった。壁に大穴が開き、角は踏みつぶされたかのように屋根ごと崩壊している。襲撃されたのか、ユーリたちを襲った連中が踏みつぶしていったのか分からない。両方かもしれない。

ユーリとジーマは、吹き飛んだ壁の穴から中を覗き込んだ。室内は外側と同じく爆撃を受けたような有様になっていた。人間がいる様子はない。化け物もいなさそうに見えた。

ジーマが後続を呼ぶ間、ユーリは室内の様子を調べた。オフィスのような場所だが、壁際のデスクには、粉砕された大きなモニターがいくつもひっくり返っていた。別の壁には地図や予定表などが貼り付けられたコルクボードと、氏名が書かれたホワイトボード――おそらくは勤務表が掛けられている。完全に失われた壁の向こうを見ると、セキュリティゲートの残骸があった。頑丈そうなスライドドアで、展開式の車止めも設置されているが、怪物の群れの突進相手には無意味だったことを示している。

ここは警備員――あるいは警備兵の詰所だったようだ。ユーリは軽く中を見て周った。洗面所、ロッカールーム、仮眠室、給湯室。特に妙な物はない。ひどく破壊されているせいなのか分からないが、建物が新しいのにひどく汚れている気がした。あちこちに黒い錆びか汚れのようなものが浮いている。

ほどなくして残りのチームが合流した。ヴァディムは目を閉じて動かないが、少なくともまだ生きてはいるらしい。

「守衛の詰所らしいな」

中に入って見まわしたセルゲイも、ユーリと同じ結論に至った。

「使えそうな物を探すんだ。地図が一番欲しい。情報になりそうな物なら何でもだ。書類でもＰＣでもだ。武器と弾、医薬品や食い物があればそれもいただけ。支援チームは周辺警戒。俺と機動

チームの2人、レフは家探しだ」
「私も探す」
セルゲイが指示を出していると、レーニャがうめくような声で言った。左手の包帯には血が滲んでおり、拳銃を握った右手で手首のあたりを押さえている。
「少尉は支援チームの指揮を。きつそうなら拳銃は持たなくても大丈夫です」
レーニャは何か言おうと口を開きかけたが、何も言わずに窓の外に銃を向けるディミトリらの方に向かった。拳銃は手放さなかった。
「大丈夫かね、あの人」
ジーマがユーリにだけ聞こえる声でつぶやいた。それが左手の怪我の事なのか、それとも精神状態の事なのかは分からなかった。
それ以上は何も言うことなく、ユーリとジーマはコルクボードの表面や机の中身を漁り、レフとセルゲイは他の場所を見て周った。
「あれはやりすぎだろ」
ユーリが机の中の書類をかき分けていると、ジーマが他の隊員には聞こえない声で呟いた。低い声だが、非難の響きが混じっているのが分かる。何のことか分からなかったが、すぐにヴァディムに銃を突き付けて黙らせたことだと分かった。
「ああでもしないと、あのまま暴れて失血死だ」
「……マジで撃っちまうかと思ったぜ」
「安全装置はちゃんと掛けていた」
ヴァディムにどれだけ罵られたところで、ユーリには怒る理由が全くなかった。腕を吹き飛ばしたのは事実であり、そうせざるを得なかったのも事実であり、腕を失った人間がパニックになるのも当たり前の事だ。単純な事実にいちいち動揺しても意味が無い。
「お前だったら殺っちまってもおかしくないからな……」
「風評被害だ」
「アブハジアでおまえがイカレ野郎だって知られたって話、聞いたことあるか？　飯を食う時と、銃撃戦やってる時と顔が変わらねえって」
「顔に出にくいってだけだろ。こんな時だと、気にしてる暇もない」
感情の起伏ウが小さい。過去にそういわれたことが何度かあった。少なくとも顔には出にくい方であることは自覚していたが、内心の情動までそうなのかは分からなかった。他人と自分の感情を比べることはできない。
もしかすると、生きることへの執着が小さいのではないかと思うこともあった。確かに、大きな目標があるわけでも、喜びに満ちた人生を送っているわけでも、大切な存在がいるわけでもない。ただ、今はやるべきことが目の前にある。この場で自分の頭をAKでふっ飛ばさない理由としては、それで十分だった。
ユーリは机の中を次から次へと漁っていった。入出記録があり、物資の搬入やゴミの搬出、定期的な人の出入りがあることが記されている。僻地にあると言うだけで、完全に閉ざされているわけではないらしい。
探し物を続けていくと、表紙に〝通信規約厳重保管〟の文字が

記されたファイルとが見つかった。
「こいつは結構な物があった」
「エロ本なんかいらねえよ」
「くたばれ」
混ぜ返したジーマに中指を立てて見せ、ユーリはファイルを引っ張り出した。めくってみると、簡単な建物の地図と、内部の部署の番号が載っていた。
「そっちは？」
ユーリが尋ねると、ジーマは手にした紙を振って見せた。
「地図はあった。順回路図とか、各所点検記録とか。あんまり詳しい奴じゃないけど。通信機器は全部逝ってるな。電気も来ていない……。建物が壊れたせいだけじゃなさそうだな。にしても汚ねえな」
「これだけ壊されてたらな」
「いや、そうじゃない」
そう言って、近くにあるキャビネットの側面を指さした。塗装された薄いスチール製の、どこにでもあるようなものだったが、明るいグレーの表面に黒い物がびっしりと張り付いている。まるで黒カビに侵された壁紙だった。
「錆なのか何なのか分からんが……。金物の表面が全部これだ。アルミもステンレスも関係なしだ」
ユーリは錆ともカビともつかない物に目を近づけた。ジーマの言葉通り錆に似ているが、小さな結晶のようにも見える。海外の塩湖の写真で見た、地面に析出した塩を思い出した。こちらの色は白ではなく黒だが。
軽く触ってみると、分厚い手袋越しに硬く脆い感触が伝わってきた。付着しているのではなく、錆のように表面が変化しているらしい。何かは見当もつかなかった。
そうしている内に、セルゲイとレフが戻ってきた。セルゲイは救急箱を見つけ、解熱鎮痛剤をレーニャに渡した。レフの方は銃のキャビネットを見つけたが、中身はどれも持ち出されていたらしい。
最大の収穫物である地図には、この〝施設〟の規模が記されていた。敷地は縦横４ｋｍずつ程度。北東は山地で、それ以外の場所に道がつながっている。一番大きな道路はユーリらが属する第１中隊が封鎖していた物で、まっすぐ進めば詰所の横にある正門の前まで来れるようになっている。ここまでは、最初に提供された地図からも把握できた内容だった。重要なのは敷地内部の話だ。
敷地の中には詰所から南東に保健管理センター――それなりに大きいので病院というべきか――と事務所があり、その隣に居住地用アパートや売店、会館の並ぶ区画がある。職員やその家族の生活の場だ。
北東には大きな建物が３つあり、ここは簡単に研究棟Ａ～Ｃとだけ記載されていた。それら以外の区画とは大きな道路で隔てられ、さらにフェンスで囲まれている。
研究区画の横には警備部隊の駐屯地があった。隣接した区画に、発電所や浄水場、燃料貯蔵庫などの基幹インフラ施設がある。
全体として、敷地の広さに比して建物の数が少なく、区画の間もかなり開いていた。元は別の建物などがあって、取り壊されたのかもしれない。

核種の大きな建物以外にはいくつか警備員の詰所がある。さらに駐屯地から山地の方に向けて細い道路があり、その先にある小高い山の上には通信施設が置かれていた。研究区画と駐屯地で正三角形を描くような配置だ。

正門からの道路は２つに分かれ、片方は居住区の前を通り、駐屯地やインフラ関連の区画へと続いている。もう片方は研究区画の方へと延びていた。車があるとすれば物資の運び込みが頻繁にあるはずの居住区角、そして駐屯地。

「まずは病院だ。なんというか、大学のキャンパスみたいだ」

地図を見たレーニャが言った。ユーリは大学に行ったことはなかったのでよくわからなかった。いずれにしても、怪我人がいる集団にとって、医療施設が近くにあるのは都合がいい。危険な物を研究しているところなら、患者を隔離する場所があるかもしれない。普段なら近寄るべきではないが、今はかえって安全な場所と成りえる。

次の目標が決まり、ユーリたちは再び霧の中に足を踏み出した。地図で地形が分かったが、視界の悪さは変わらないどころか、より悪化しているように思えた。霧どころか煙幕がたかれているような気さえする。

暗視装置越しでも、それなりの規模があるはずの建築物の形状が見えない。かすかに見える道路わきの構造物を頼りに、病院があるはずの方角へと歩いていく。周囲にはすぐに飛び込めそうな遮蔽物が見当たりない。木の枝が揺れる音すらなく、静寂が重さを伴っているかのように息が苦しくなってくる。

無駄に広い道の端に沿って移動を始める。１００ｍも歩いたかと思えるころ、暗視装置の視界に建物の影が入り込んできた。肉眼では全く見えない上に、暗視装置の方もさらに視程が落ちている気がする。

建物に近づくにつれて、ようやくその全貌がはっきりしてきた。高さは４階建て。地図で見た者よりも大きく見える。ちょっとした市の総合病院ぐらいあるかもしれない。

見たところでは窓は割れていないが、中の温度は外気と変わらず、画像内での色はほとんど同じだ。中で生きた人間が動いている様子もない。

豪雪に見舞われる地域の建物の例にもれず、基礎は地面より高めに作られ、１階の窓は積もった雪よりもさらに高いところにあった。雪が無ければ、地上からの高さは４ｍといったところだろうか。

壁に沿って視線を這わせていった先にスロープがあった。正面玄関と思われたが、思わぬものが転がっていた。車ほどもある金属の塊だ。驚いたことに、まぎれもない車だった。

念のためトラップや狙撃――化物がそうした手段をとるとは思えないが――への標準的な警戒を取りながら接近して、肉眼で見える範囲に入り込んだ。ジーマが警戒する間、ユーリが車の様子を確認した。軍で使われているＶＰＫ（ヴォルク）-３９２７１歩兵機動車。装甲で覆われた特大サイズのＳＵＶのような見た目をしている。第一大隊が派遣した偵察部隊は違う車を使っていたので、国家親衛隊が使っていた物のようだ。おそらくは、最初に投入された特殊部隊の連中が乗ってきたのだろう。

車はスロープの上にある正面玄関に、逆さになった状態で側面

から突っ込んでいた。スロープのコンクリートは削られ、入り口の上にある屋根を支える柱の1本が無くなっていた。

爆薬による熱破壊はなく、交通事故の時のように純粋に力だけでふっ飛ばされて叩きつけられたようだ。重機関銃弾の直撃や対戦車地雷の爆発に耐える装甲を持った、重さ10tの車をふっ飛ばす相手との接触事故。この車に乗ってきた連中も、BMPを体当たりして動かす奴らや、戦車を踏みつぶすデカブツの類と出会ってしまったようだ。

後部ドアは開いており、キャビンはもぬけの殻だった。脱出できたとしても、どこに行ったのか。血痕などはない。ない。シートベルトのいくつかはナイフで切断されていたが、これは生きている者が自分で切断した証拠だ。化け物が座っている人間をベルトごと引っ張れば、ベルトよりも先に人体の方がちぎれてしまう。

武器か何かが残されていないかと期待したが、乗員はそれらをすべて身に着けたまま出たらしい。ルーフのハッチには重火器が付けられていたようだが、車につぶされてしまっていた。つまり、役に立ちそうなものは何もない。

ユーリは車の装甲の表面にも、あの黒い錆のようなものが張り付いているのを見た。触ってみるとロッカーの表面に浮いていた物と同じ感触がした。〝これ〟にとって、材質や表面塗装の有無は関係ないらしい。プラスチック製品には付いていなかった。やはり錆なのかもしれない。

車の様子は、これ以上外にいない方がいい理由としては十分だった。事故の相手と出会えば、全員が原形をとどめない姿に変わることは間違いない。

病院の入り口はほとんど塞がれていたものの、横に一人ずつなら入れそうなすき間があった。

ユーリが気配を感じて振り返ると、セルゲイが幽霊のように静かにやってきていた。ユーリよりも一回り重たいはずだが、あだ名のように本物のクマのように静かに動くことが出来る。兵士としては心強いが、こんな状況では心臓に良いとは言い難い。

「俺とお前らが先に入って中を確かめる。入り口がこうだから、化物どもも入ってこれんだろう。中にいても小さい奴だろうから、何とか殺れるはずだ」

「狭いですけど、軍曹が入れますかね？　腹とか」

元々の体格の良さに加えて、多量の重ね着と装備の塊で体積が増えている胴体を指さしてジーマが言う。セルゲイは後続に合図を送りながら、後で頭の皮を剥いでやると毒づいた。

先にジーマが入って安全を確かめ、続いてセルゲイが入る。問題なさそうだと言う声がしたところで、レーニャや担架を運ぶ連中が到着した。ユーリも病院の中にもぐりこんだ。

中は意外にも普通の病院の待合室だった。受付のカウンターがあり、ソファがあり、観葉植物の鉢が置かれている。窓は雨戸が下ろされていることもあって、かなり薄暗かった。

セルゲイがフラッシュライトを灯すと、ここにも入り込んでいた霧に光が反射し、中の空間は換気もせずにタバコを吸い続けた部屋のようになった。廊下の奥や受付の奥の事務室を覗いたが、人の気配も、牙やら触手やらが生えた奴らの姿もない。

ディミトリ、ヴァシリと続いたところで、ユーリは足の下に何かの振動を感じた。壁に手を当てると、何かが揺れ動いている気

配があった。
外の連中を急がせ、ヴァディムの乗った担架を運び込ませる。足の下から伝わる振動が大きくなった。担架の向こうに目をやる。霧にさえぎられて近づいてくる物の姿は見えないが、かなりの重量があることは確かだった。
ヴァディムを固定したまま縦にして入れられたタンカーの反対側を持って引き入れようとした時、真上――正確には正面玄関の屋根の上から、コンクリートの剥がれ落ちる音がしてきた。
振動の元は霧の向こうではなく、真上から来ていた。
それに気づいた瞬間、屋根の縁から巨大な手としか言い表せない物が現れた。壁が迫ってくるようにそれが近づいてくる。ヴァディムの担架が勢いよく突っ込まれ、ユーリは病院の中に弾き飛ばされた。
激しい地響きで床が震え、外から誰かの叫び声が聞こえてくる。屋根の車の衝突で柱を失っていた側が耐えきれなくなり、粉塵と共に崩れ落ちた。
「何だ？　どうなった？」
セルゲイが怒鳴るのが聞こえた。ユーリは体を起こして状況を確認した。ヴァディムは中に入れたが、他の連中は外だ。自分たちが入ってきたすき間から外を見ると、壊れた瓦礫の向こうにとんでもない物が見えた。
バカでかい、博物館で見たティラノサウルスの化石と同じぐらいの大きさがありそうなヤツが、病院の前の雪の中に立っていた。化石と違って灰色の肉がついており、足は4本付ある。猫にも似た体型だが。足は節くれ立ち、関節がいくつあるのかわからないねじ曲がった形をしていた。
顔は巨大な図体に比しても不釣り合いなほど大きく、毛のないサル――見方によっては人間のそれに似ている。そして、上下が逆さになっていた。ブリッジをしたコンクリート製の彫像がこちらを向き、下卑たニヤニヤ笑いに近い表情を浮かべている。剥き出しになった歯は、異様に小さく、数が多かった。
額に当たる位置からは、細長い腕に似たものが2本生えていた。その片方の先端に人影が捕まえられ、ひたすらに絶叫を上げ続けていた。
捕まえられている者が来ている装備は、車両搭乗員の緑色をしている。声で運転手のアントンだと分かった。
ユーリが見ている前で、サルが額の腕を動かしてアントンを持ち上げ、無造作に口に運んだ。アントンの声がさらに高くなり、上半身が口の中に入れられて顎が閉じた瞬間、スイッチを切ったように止まった。
捕まれたままの下半身から、はらわたとも血液とも使いない物がこぼれ落ちている。サルの顔はそれを無造作に放り捨て、外へと向き直った。その視線の先には、病院の中に入り損ねたレーニャたちの姿があった。銃声が鳴るが、巨大すぎる相手は弾丸が当たっている様子さえ見せない。ユーリのいる病院の入り口と、レーニャたちの位置の間には化け物がいるため、こちらに来ることはできなかった。
ミハイルがＲＰＧを撃つために距離を取ろうと走っているが、デカブツの歩幅が大きいせいで逃げることもできない。雪に足を取られ、アントンが喰われている隙に稼いだ距離は瞬く間に詰め

られていた。
　ユーリはパトロールバッグを外し、入ってきたすき間から外に出た。ＲＰＧ‐２６の上にある出っ張りから突き出た、手榴弾のそれと同じ安全ピンを引き抜く。先端にあるはしご型の照星を引き起こし、でっぱりの上にある照門も起こした。照門に覆われていた赤い発射スイッチが露わになり、照門と連動して撃発装置のバネが縮む感触が伝わってきた。
　その間に、サルの顔はレーニャたちを間合いに捉えていた。身をかがめて額の腕を振るって、誰かを捕まえている。ユーリは急いでＲＰＧを右肩に担ぎ、引き起こした２つの照準を化物の尻に合わせた。昆虫を腹側から見たような形で関節が付いているのが見えた。
　発射スイッチを押し込んだ瞬間、砲口を覆うゴムのカバーを突き破ってロケット弾が飛び出した。筒の背後から、同じだけのエネルギーを持つ爆風が噴き出して反動を相殺する。撃ち出された砲弾はロケットブースターが点火する間もなく、発射薬が生み出した勢いだけで化物の尻にたどり着き、轟音と共に閃光と大量の煙を炸裂させた。
　化物は口に運ぼうとしていた誰かを取り落とした。そして、ゆっくりと振り返り、自分の尻に火薬を撃ち込んだチビの方を向いた。
　その尻からは相変わらず煙が上がっていたが、特にダメージを受けた様子はなく、不快な笑みを浮かべた醜い顔にも変化はなかった。
　それでもデカブツの注意はこちらに向いた。この隙を、レーニャたちが利用できるかどうかは分からない。次は自分が捕まってから、再び逃げ込む必要がある。
「ユーリ、いっぱい来てるぞ！　早く戻れ！」
　ジーマの怒鳴る声が聞こえた。ディミトリのＰＫＰが吐き出した曳光弾が、デカブツとは違う方――広い道路の側――へと送り込まれた。霧の向こうからこちらに突っ込んでくる影が見える。
　とっさに空になったＲＰＧの発射筒をそちらに投げつけ、病院の方へ走り始めた。発射筒が何かにぶつかり、ガラス繊維が砕ける音が続いた。ロケットの発射に耐える筒が、小枝のように破壊されている。
　ユーリは一目散に走った。軍に入って、相手に背を向けてまっすぐ逃げることになるとは思わなかった。そうすれば撃たれてしまう。だから、逃げる時は弾丸をばらまき、敵を牽制しながら下がる。仲間と共に、敵の方を順番に向きながら逃げるのだ。
　だが、今はそんなものはどうでもよかった。相手はこちらを撃ってくるのではなく、文字通り尻に噛みつこうとしている。撃ったところで牽制にすらならない。これは敵兵からの撤退ではない。猛獣に追われる原始人の逃走だった。
　自分でも驚くほどの速さで病院の入口へと戻り、半ば飛び込むようにしてすき間から中に入った。
　ユーリの後を追いかけてきた奴の一頭が、隙間から顔を突っ込んできた。耳と毛のないボルゾイ犬のような顔をしている。どこか人間を思わせる口元をしており、目は正面を向いて付いていた。髑髏に生皮を貼り付けた者に、犬の口元を縫い合わせたかのように。
　そいつは頭のみならず、腕を突っ込んできた。骨と皮だけで作

られたような灰色の腕で、先端の手は人間と同じように4本の指と対向した親指があった。それがこちらを掴もうと繰り返し振り回され、顔はどこを見ているのかわからない目つきで、何度も歯を咬み鳴らした。犬なら吠えるところだが、こいつも鳴き声は一切出さない。それがかえって異様さを際立たせていた。

ヴァシリが気色の悪い顔面にライフルで弾丸を撃ち込んだ。目と目の間に風穴が開いたにもかかわらず、そいつは平気で腕を振り回し続けている。ヴァシリが続けざまに5発の弾丸を頭に叩き込んで顔の上半分を吹き飛ばすと、ようやく大人しくなった。それでも、腕や下あごが何かを求めるかのように緩やかに動き続けていた。

ユーリは化物の破壊された傷口を見た。やはり血液などは流れ出ていない。内臓や骨格に見える物もなく、黒や灰色の繊維や粘土のような物だけがあった。小さな金属片が混じっているようにも見える。まるで繊維とパテで作った人形の中身だった。

「向こうはどうなった？」

バックパックを回収して背負いなおしたユーリに、セルゲイが尋ねてきた。

「アントン死亡。他は分かりません。少尉もいるから何とか安全な場所にいけるかも」

「そいつは、期待できるとは言い難いかもな」

デカブツと小さい奴らの興味がこちらに向いていれば、レーニャたちが生き残れる望みはあった。病院の方も犬面の死体が隙間に詰まっていれば、10tの車でふさがれた場所に入ってくるのは容易ではない。ここは安全だ。

しかし、次の瞬間にはその望みにもひびが入った。地響きがして、横転した車の向こうに巨大な気配が生じた。硬い装甲の表面を硬い物がひっかく音がして、横転した装甲車の車体がガタガタと揺れた。そしてついに、装甲車の位置が外にずれた。

霧が中に忍び込み、新たな隙間の発生を示した。装甲車がさらに大きく動く。上に向いたタイヤに、同じぐらいのサイズがある爪を持つ指がかかっているのが見えた。デカブツの前脚だった。それが装甲車を動かそうとする音に加わり、装甲にぶつかる音やひっかく音がいくつも聞こえてくる。

「マズいぞ……」

ユーリはとっさに周囲を見回し、探していた物が見つかった。壁に小さなねじで取り付けられたプラスチック製のプレート。避難経路図が記してある。

ユーリはナイフを出し、壁とプレートの間に刃先を差し込んで経路図をはがしとった。地図の中身は簡素だが、建物のおおよその構造が分かる。2階にレントゲンやCT関連の部屋がある。放射線を扱うところなら、かなり頑丈なはずだ。ICUや、その他にアクセスが限られている病室もあった。階段の上には防火壁もあるはずだ。

「2階！　レントゲン室がある」

セルゲイが廊下を指さした。

「ヴァシリ、ジーマ、担架を持て。ユーリ、先導しろ！」

そうしている間にも、装甲車と入り口の間の隙間はさらに大きくなった。開いているところに、また別の〝何か〟が顔を点きこんでいる。黒色の骨と腱と繊維で形作られた、ムカデのような姿

だった。いやらしく身をくねらせながら、何とか体をねじ込もうとしている。

ユーリは避難経路図を手に、右手の廊下へと進んだ。担架を持ったジーマとヴァシリ、ディミトリの順に、セルゲイが最後に続いた。金属がコンクリートと擦れる音がひときわ長く続き、化物用の通用口がさらに大きくなったことを知らせてきた。

「入ってきた！　行け！　早く！」

セルゲイの大声に、ＡＫの連射音が被さった。ユーリは手にしたプレートの地図と周りを見比べながら、担架が付いてこられる限りの速度で足を進めた。曲がり角の先に何かいるかもしれないという懸念は、後ろから迫ってくる現在進行形の脅威を前にしては確認するだけの余裕はなかった。

薬剤部、耳鼻咽喉科と眼科の診察室を通過し、左手にあった階段の吹き抜けに入った。一気に二階へと上がったが。防火シャッターが下ろされていた。

「ふざけんな、くそボケ！」

ジーマが悪態をつきながら、担架を下ろしてユーリと共にシャッターに手をかけた。時間稼ぎのためにセルゲイが下の階に手榴弾を落とす。爆発音と煙が上の階まで吹き抜けたところで、ディミトリが真上から下の階に向けて銃弾をばらまいた。

シャッターは重量がある上に、どこかが錆付いているのか、かなりの抵抗を見せた。おそらくはあの黒い錆びか何かが削れる音と軋みを出しつつ、ようやく人が通れるだけの隙間が出来た。ユーリが確認し、ジーマが先に入って担架を引っ張る。ヴァシリがそれに続いたところで、ディミトリの機関銃が弾切れになった。

弾帯を交換する時間がないと判断したセルゲイが、後を継いで銃弾を下にばらまき始める。鉛玉が降り注ぎ、跳弾を起こす下の階から、何かが壁に飛びつくのが見えた。人間ほどもあるカエルのようなそいつは壁に張り付いた後、ばね仕掛けのようにセルゲイめがけて飛び掛かった。

予想外の方向から突っ込んできた相手への反応が間に合わず、セルゲイはカエルに激突されて吹っ飛び、防火シャッターの手前に転がった。上には化け物がのしかかっている。

その姿は形容しがたかった。手足は4本あるが、全体が半ば溶け崩れた蝋燭で構成されているような形をしている。下半身は膨らみ、上半身は棒のように突き出している。

その上半身が縦に割れて広がった。その内側に、杭のような長い牙がいくつも並んでいる。開いた〝顎〟がセルゲイの頭を挟み込んだ。喉が爆発したような叫び声が、セルゲイからほとばしった。顎に挟まれているせいでくぐもっているにもかかわらず、防火シャッターが震えるほどだった。

セルゲイの足が陸揚げされた魚のように激しくのたうった。ユーリはそいつに銃口を向けたが。弾が貫通してセルゲイも殺すことに気が付いて止めた。

「ヴィクトル、手榴弾を落とせ！　軍曹のＡＫも使え！」

ユーリはパトロールバッグの背に付けていたカバーのフラップを外してショベルを引き抜いた。手斧を使う要領で振りかぶり、セルゲイの頭を挟んでいる〝顎〟の片側の付け根に、思いきり叩きつけた。良く研がれた刃が、思いのほか容易く化物の体にねじ込まれた。

ショベルの柄を通して、ユーリの手に、何とも言い難い感触が伝わってきた。中に多数の繊維が入った硬質ゴムと粘土を合わせたような物質。それらを一気に断ち切る感触だった。

化物は一度では離さなかった。もう一度刃を叩き込むと、あごの片側から力が抜けた。ショベルの角を顎の間に挟んで、無理やり引っ張ってこじ開ける。〝食事〟の邪魔をされた化け物が、セルゲイの頭から口を放した。牙が大量の血で赤く染まっている。セルゲイはもう叫び声をあげず、足を痙攣させているだけだった。

化物がユーリの方を向いたところで、肩と思われる部分を思いきり蹴り飛ばした。思いの他軽く、階段を転げ落ちて踊り場にひっくり返る。起き上がって来ようとするところに、片手でAKを持ち上げて弾をばらまくと、足の1本がちぎれた。これで機敏には動けなくなる。

「ディミトリ、軍曹をシャッターの向こうに入れろ！　俺もすぐに行く」

セルゲイの方を見たが、首から上が朱に染まっており、どうなっているのかが全く分からなかった。手足がまだゆっくりと動いており、息はしているように見える。

ディミトリがセルゲイの重たい図体と装備をシャッターの下に押し込み、自分もくぐるのを見て、ユーリもシャッターをくぐった。二人がかりで引き上げたところで、階段を上がってきた連中が、シャッターの隙間から腕なのか頭なのかもわからない物を突っ込んでくる。

シャッターを下ろして連中をギロチンの刑にかけてやりたかったが、下手に近づくのは危険だった。

ユーリは経路図を見ようとしたが、先ほどの騒動でシャッターの向こう側に落としてしまっていたことに気が付いた。レントゲン室の場所を思い出そうとしたが、完全に頭から抜け落ちている。

避難経路図なら他にもあるはずだと気づいて周囲を見回したとき、ジーマが廊下の端を指さした。

「人がいる！」

その言葉を聞いて、慌ててジーマと同じ方を向いた。廊下の先に、壁に隠れるようにしてこちらを見ている男性がいる。人型の化物でも、死体でもなく、まぎれもない生きた人間だった。その表情には困惑と恐怖、どうすればいいのかという焦りが見て取れた。

「怪我人がいる、助けてくれ！」

とっさに、ユーリの口からその言葉が飛び出した。この場では彼の存在が頼みの綱だった。今まで生きてきたのなら、安全な場所を知っているはずだ。ここは病院だ。生存者が関係者なら、怪我人の存在は彼がユーリたちを助けるきっかけになる。

「治療できる場所は？」

ユーリに呼び掛けられて驚いていた男は、少し戸惑った後にこっちだと腕を振った。

「ついてきて！」

それなりにしっかりした声だった。

「ジーマ、担架もって先に行け！　ディミトリ、軍曹の肩持て。行くぞ！」

ディミトリが血まみれのセルゲイの腕を自分の肩に回して引き起こす間、ユーリはシャッターの下から入り込んで来ようとする

連中に弾丸を撃ち込んだ。引っ込んだところに、隙間から手榴弾を向こうに転がす。

腹に響く爆発音と衝撃波がシャッターを揺らすのを聞きながら、ユーリはディミトリと逆側の腕を肩に回し、セルゲイの体を引っ張り上げた。大柄な軍曹の図体は、装備を抜きにしても重たかった。顔はもはや無茶苦茶になっており、左目は失われ、ヘルメットやヘッドセットにも穴が開いている。ヘルメットが無ければ、頭自体が熟れた桃のように潰されていただろう。ヘルメットに守られていなかった部分は穴だらけで、フェイスマスクは赤一色になっていた。それでもセルゲイはまだ死んでおらず、呼吸だけは確認できた。

生存者の後を追うジーマとヴァシリに続き、ユーリは子にかけの軍曹の体を必死で引きずった。後ろから足音が聞こえ、手榴弾にもめげなかった連中がシャッターをくぐってきたのが分かった。

振り返る暇もなく、いくつかの角を曲がった先の奥まった一角に来た。両側に窓が無い廊下の突き当りに、ガラスのスライドドアがあった。その奥に、小さな部屋を挟んでもう一つドアがある。小部屋の横には、中の様子を確認するための監視室がある。閉鎖病棟か、それに類する何かだと分かった。

ドアの向こうにも誰かがいた。緑のセーターを着た女性だった。驚いた表情で、こちらに来るように手を招いている。声は聞こえないが、助けてくれる意思はあるようだった。

最初のドアにたどり着き、男性がドアをこじ開けた。だが、向こう側の女性はドアを開けようとしない。

「こっちを閉めないと向こうは開かないんだ！　早く」

そう言われ、ユーリは急いで小部屋に入り込んだ。ガラスの向こうでは霧がたなびき、自分を追いかけてきた化物が3頭ばかり、こちらに走ってくるのが見えた。

男がドアを無理やり閉めてロックをかけると、女性がようやくドアをスライドさせた。

「入って、入って！　早く！」

その声に促されるまま、全員でなだれ込むように室内に入った。女性が急いでドアを閉じてロックをかける。だが、化物どもはかなり接近していた。補強のドア枠以外はガラスなので、向こうからこちらの姿は丸見えになっている。

化物どもは、うっすらとたなびく霧と共に近づいてきた。

イノシシほどもあるエビの腹から、人間の物に似た脚が6本生えている奴。鳥の足で二足歩行する人間サイズのダンゴムシは、歩脚の代わりに爪の伸びた指に似た物が生えている。ネコに似た頭から伸びる、2mほどもある昆虫のような〝腕〟で歩行する奴。胴体の代わりに、指先に鉤爪を備えた手が4本付いている。

陣地で鉄条網に引っかかった奴を初めて見た時と同じように、それらの姿はユーリに吐き気にも似た不快感を覚えさせた。人間の本能に恐怖と嫌悪を植え付ける姿。逆に、恐怖と嫌悪そのものが具現化しているのかもしれない。そうであっても決しておかしくないと思わせる物がある。

ユーリはガラス越しに、化物たちに照準を合わせた。ガラスは強化ガラスのはずだが、化物どもが本気でぶつかってこれば、何の防御にもならない。

塹壕にいた時に見たように、不快感の具現化ともいえる連中が突撃してくるのを待ち構えていたが、ガラスの向こうでの動きは予想とは大きく異なった。こちらが見えないかのように、ゆっくりとやってくる。探している様子さえない。目で透明なガラスの向こうに逃げ込んだのに、こちらの存在そのものが認識から消えたかのような動きをしていた。

女性がユーリのＡＫの銃身を、掌でそっと押し下げた。ユーリもそれに逆らわずに銃口を下げ、安全装置をかけた。

化物は少しの間うろうろしていたが、興味を失ったかのように踵を返し、どこかへ消えていった。

姿が完全に見えなくなったとき、極限まで張りつめていた神経が一気に緩んだ。ジーマとディミトリがへたり込みかけ、ヴァシリは目を見開いたまま呆然とガラスを見つめていた。

「怪我人がいるの？」

セーターの女性の言葉で、ユーリはその場にへたり込みそうになるのを思いとどまった。ここに来て、ようやく生存者二人の姿をよく見ることになった。女性の方は３０と少しぐらい。黒い髪をショートカットにして、鋭い切れ長のとび色の目をしていた。疲れてやつれているせいもあるかもしれないが、元の性分から来るものもありそうだった。

男性の方はもっと若く、年は２０代の半ばかそのぐらいだった。暗い褐色の髪で、頬骨が高く痩せている。を大学に行ったことはないユーリだったが、大学の研究生というのはこういう人物なのではないかと思わせた。

「二人。重傷だ」

ユーリは担架に乗せられたヴァディムと、顔が血まみれになっているセルゲイを示した。その姿を見た女性が顔色を変えた。

「ニキータ、道具を用意しておいて。外傷の治療よ。シートを敷いておいて」

手早く指示を出し、女性はユーリたちの方を見回した。誰がリーダーなのかを値踏みし、すぐにユーリに目を止めた。

「この人たちを運びましょう」

腰が抜けかけている隊員を蹴飛ばすようにして立たせ、女性の後に続いて奥にある部屋の一つに入った。よく見る病院の診察室があった。大きめの部屋で、ベッドが一つと、動いていないパソコンのモニターが乗ったデスクが一つ。カーテンが掛けられたスペースの奥には、採血の時に使われる机に、歯医者で見るような診察台があった。

パソコンのデスクには、この場には不釣り合いな生存者が座っていた。１０歳ぐらい女の子。背中まである長い髪は真っ黒で、ぶかぶかのダウンジャケットを着ている。デスクの上に紙を置いて、何かを書いているようだった。

ユーリたちが入ってくると、女の子はこちらを見た。神と同じ色の目が、恐ろしいほどに真っすぐこちらを見つめてくる。得体のしれない血まみれの兵隊たちの姿を見る表情には、恐れや困惑の色はなかった。首をかしげてこちらを見る様子は鳥を思わせる。

研究生風の男――ニキータがベッドにビニールのシートをかけている。女の方の指示で、ヴァディムをベッドに、セルゲイを診察台にそれぞれ寝かせた。

「ニキータ、そっちの患者さんをお願い。輸液と縫合を。兵隊さ

んたちも手伝って。向こうに1人。この人は大きいから2人。すぐに装備を外してあげて。私たちじゃ分からないから」
「ディミトリ、入り口の方を見張れ。念のためだ。化け物が入ってきたらすぐに知らせろ」
ユーリの指示を受け、ディミトリが機関銃を携えて部屋を出た。ユーリとヴァシリがセルゲイ、ジーマがニキータと共にヴァディムの方に付いた。ユーリが赤い腫瘍のような見た目になったヘルメットを脱がしていると、女性はデスクで書き物を再開した女の子の方を見た。
「イロナ、今からこの人たちを助けないといけないの。他の部屋で続きをして」
イロナと呼ばれた女の子は、先ほどと同じように表情が読み取れない目つきで全員を順番に見た後、不平の一つもこぼさずに紙を持って椅子から降り、部屋を出て行った。後ろを振り返ることもなかった。
ユーリがヘルメットを外し、女性がフェイスマスクをハサミで切り開くと、セルゲイの人相は元の顔が分からないほどになっていた。体格と共にクマというあだ名のもとになった髭面の表面には、指が入りそうなほどの穴がいくつも開いている。ユーリは思わず後ずさりそうになり、ヴァシリははっきりとたじろいだのが分かった。
女性の方は全く動揺を見せず、負傷者の血液型と怪我をしてからの時間を尋ね、手早く処置をしていく。輸液、止血、消毒。頭に開いた穴の周囲の毛を剃り、ヘルメットやヘッドセットの破片をピンセットで取り除く。ユーリとヴァシリも、装備の取り外し、点滴袋の保持、頭の位置の固定などを、指示されたとおりに行っていく。
女性が顔面の穴の処置をしているときに、入り口の方で人が来る気配がした。ヴァディムかと思ってユーリが見たが、顔を出したのは見知らぬ男だった。４０ばかりで、体格が大きく、丸顔の上にある頭髪は生え際が後退している。セルゲイの体格の置き性クマとすれば、こちらは肉牛だった。
「君たちは……、救助か？　早くここから脱出させてくれ。すぐにだ！　もっと部隊がいるんだろ？」
返事を待たず、男は堰を切ったように話し始めた。早く連れ出せ、化け物がいる、戦っていたんだろう、治療は脱出してからでいいじゃないか。
「悪いがおっさん。助けじゃねえし、逃げたきゃここから自力で歩いて出るしかねえよ」
ジーマが言うと、大柄な男の顔色が変わった。
「無責任な！　何をやっているんだ！」
誰に対しての言葉化は分からなかったが、今度は恨み辛みの言葉が止まらなくなった。
「何だ、あれ……」
ヴァシリが呆れたように言う。
「先生、役に立てないなら出て行ってください！」
ついに女性が顔を上げ、ＲＰＧ並みの激しさで以て大柄な男を叱り飛ばした。叱られた相手は何かをモゴモゴと言ったが、女性は有無を言わさず、恐ろしい目つきでにらみつけた。先ほど出て行ったイロナという少女に似た部分があったが、こちらには苛立

ちの感情がこもっていた。
大柄な男はすごすごと退散し、女性はすぐに作業を再開した。
「何なんですか、あの人？」
ヴァシリが女性に聞いたが、ユーリは止めた。
「そういうのは後だ。頼りになる奴かそうじゃないかだけ知ればいい」
「いいこと言うわね」
セルゲイの顔と頭に開けられた穴全てを処置するのに４０分近い時間を要した。何とか終わった時、その顔はガーゼと包帯に覆われて、フェイスマスクをした時と同じような状態になっていた。口元を覆う包帯の間からは、喉にまで挿し込まれたエアウェイの端が覗き、酸素ボンベにつながれていた。セルゲイの分厚い胸はまだ上下していた。
「ここだとこれで限界。本当なら緊急手術だけれど、私たちじゃ無理ね……。顔の穴はひどいけれど、命には直接かかわらない。頭の方は頭蓋骨に穴が開いていたわ。脳自体にダメージが入っているかどうかわからないけど、どうなるか分からない。ニキータ、そっちは？」
女性が真っ赤になっているラテックスの手袋を外しながらそう言った。ヴァディムはシャツだけの状態になり、失われた右腕には厚く包帯が巻かれていた。止血帯は外され、輸液の点滴が施されている。
「こちらは大丈夫です。ちゃんと止血してたからよかったですね。傷口の破壊がひどいから、できればちゃんと整えて縫合しないといけないですけど」
傷口の破壊。その言葉を聞いて、ユーリは自分がその原因だと言われるのではないかと思ったが、誰もそれは口にしなかった。
「それで、兵隊さんたち。せっかく来てくれたわけではないけど……」
女性はユーリたちを眺めまわした。死にかけの怪我人二人を抱えた、２０の半ばにも満たない若造の群れ。白い擬装服は、まだ乾いてもいない血と火薬ガスの黒い残渣でまだらになっている。そして誰もが恐怖で弱っていた。
ユーリは自分たちがどう見えているかを理解していた。汚れて疲れて怯えたガキどもだ。
「救助に来たわけじゃないって話だったわね」
「当たりだよ、先生。……医者だよな？」
「専門は内科だけどね。一つ聞いていい？」
ユーリは頷いた。
「何か食べる物持ってる？」

喫茶店文芸　2022 年 1 月号
サイト URL
http://literarycafe.wp.xdomain.jp/
監修　マサユキ・マサオ
編集　氷川省吾

2022年1月号